

---

# **空想的な自己理論。**

黒翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空想的な自己理論。

### 【著者名】

NO290C

【作者名】  
黒翔

### 【あらすじ】

私とあたしと俺と僕。

空想的な自分の理を盾に、好き勝手言つ四人を中心とした短編集。

時々仲良く、しおりちゅういがみ合つ四人の関係は、良好なのか劣悪なのか。

気軽に読めるよう、文は単調なものとなっています。それぞれ数分で読める長さです。

## 約束

「何故、突然そんな」とを言つ出す、お前は、無表情で、彼女は黒い瞳を彼に向ける。視線を向けられた少年は、目の前にいる少女に、

「前から決めていたんだ」

と言つて、小さな白い封筒を差し出す。

彼女が「何だ、これは」と尋ねる前に彼は背を向け「すまない」と小さな声で言い残し、走り去ってしまった。

残された少女は追いつきともせず、彼の姿が見えなくなるまで、ずっと彼を見ていた。

それから、渡されたそれに視線を落とし、ゆっくりとした動作でそれを開く。

其処には白い便箋が五枚ほど折り畳まれ、入っていた。

彼女は丁寧にそれを広げる。それには青色で、延々と文字が敷き詰められていた。

彼女はそれをゆっくりと眺め、一通り見終わると、息を吐いた。

「要是旅に出るが、私の誕生日迄には帰つてくるという事だな。  
……下手に引き止めて、私が彼を必要としているなど気づかれないで良かつた。

だが、この手紙を渡したといつことば、約束だな。彼は必ず私の誕生日迄には戻つてくると、

彼女は人知れず微笑んだ。

## 約束（後書き）

こんな感じで書いていきます。  
四人の名前は出さないつもりですが、気が変わると出すかもしれません。

## 女神

薄桃色の着物に身を包んだ女性が口を開いた。

「カミサマ “神様”とやらを崇めて、だつたら“メガニサマ 女神”つていつ単語は何な  
のかしらね」

彼女の問いとも言えない呟きに一人の黒髪の女性が反応した。

「所詮愚かな人間達は何も知らずに、ただ思い付いたらその考えを  
人に伝えたがるのだろうな。  
私たちも“カミサマや 神様”なんかでは無いわけだから、私の考えではその  
質問は意味を成さない」

つぶやいた問い合わせた女性は、

「貴女に訊いたんじやないわよ」

と金色の髪をすきながらぶつせりぱりぱりに言つて、

「意味の分からぬ理論をあたしにぶつけないでよね

と、彼女に背を向けた。

「何処に行くの」という黒髪女性の問いを無言で抹消し、そのまま歩き出した。

彼女の黒い瞳が映し出している先が、自分から外れたことを感じ

とつたとき、金髪の女性は「散歩」と呟いた。

## 女神（後書き）

大概是金髪の子がもう一人を嫌っている構図になるのです。  
黒髪の子はあまり気にしていないようですが。

「あたしに和平を申し出た？」

カールした金髪と藍色の瞳が特徴的なその少女が、目の前で微笑んでいる少年からもたらされた情報に驚いていた。

彼は、

「そう。彼女が、争いはもう終わりにしたい、って」

と、相も変わらず笑みを湛えながら、少女の疑問に応じた。

少女は、暫く考える素振りを見せて、彼に再び問いを投げ掛ける。

「何故、こんな急に？ 今までに沢山機会はあつたはずよ」

彼は、そんな質問なんて想定済みなんだよ、とでも言いつゝ、「元々争いを好んでいない。なのに、この争いは長引き過ぎた。彼女は元々争いを好んでいない。なのに、この争いは長引き過ぎた。それが彼女の表向きの理由。そもそも、彼女は始めっから君のことなんて嫌つてなかつたんだよ」と半棒読み口調で淡々と告げた。再び少女は何かを考えるよう虚空を眺めた。

今度の沈黙は先程のそれよりも幾分長く、それは彼女がそれだけ悩んでいるという事を示していた。

暫くして、彼女は気が進まないながらも、彼の方へと視線を戻し、ただ一言、「分かったわ」

彼は相変わらずの笑顔で「じゃあ、和解成立だね。そう彼女に伝えてくるよ」と言い残し、駆けていった。

## 和解（後書き）

遅くなりました。次も多分遅くなると思します。

今回は、気の強い方の少女と、4人目の登場です。  
これで一応全員出たかな？

ちなみに「彼女」というのは黒髪少女のことです。分かるとは思つ  
んですが。

次はその黒髪少女と今回出てきた少年をメインに書くつもりです。

彼が机へと視線を移すと、何かを必死に書き綴つてゐる女性がいた。外見はまだ若い。

彼女は、漆黒の、闇よりも深い色のつやつやとした長い髪を一つに束ね、同色の双眸は、目にも止まらぬ速さで黒く埋まつていく、机の上の白い紙に向いていた。

「何をしてるの」

その彼の問いには答えず、彼女はただひたすら文字を羅列していく。

やがて、雪のように真っ白だった一枚の紙が新月の夜のように真っ黒に染まつたとき、やつと彼女は顔を上げた。  
すかさず、彼は「何してたの」ともう一度尋ねた。彼女は驚いたように振り向いて、彼の蒼い瞳を見つめる。

暫く何かを思案するかのように首をかしげていた彼女だが、ゆつくりとその文字が敷き詰められて真っ黒な紙を掴み、彼に渡した。

しかし、それでも彼は理解できなかつたようで、もう一度彼女に尋ねた。

「……単に、文字を羅列して遊んでいただけだ」

彼女はそつなく、そっぽを向いて答えた。

その行動が、いつもの彼女と違つて、それが可愛らしく思えたの

か、彼は小さく笑みを溢した。

「……お前の弟の方が、私は……」

彼女は、彼に聞かれない程小さな声で呴いた。

## 羅列（後書き）

ノートに文字を延々羅列するのが好きなんですよ。  
更新本当に遅くなつてすいません。

空はどんよりとしていて、黒雲が空を覆っていた。

「……雨が降りそうだ」

彼女は、部屋の小さな窓から空を眺めて呟いた。

彼女の隣に立っている蒼い瞳を持った青年も「そうだな」と同調して、彼もまた、黒の闇に覆われた空を眺めた。

その時、その一人のそばへ「どうしたの」と少々高めの声を響かせ、同じく蒼い瞳を持つた青年がやって来た。

そんな彼もすぐに状況を察したのか、優しく微笑み、そして、彼女に向かって言った。

「ああ、もうすぐ雨が降りそうだね。戦とか争いとか、そういう不吉なもの前兆かな」

彼女は何も答えずに、ただ彼女の隣に居た青年のみが「そんな事言つな、兄貴」とため息混じりに返答した。

兄貴、と呼ばれた方の青年は、「はいはい」と、何を思ったのか冷たい笑みを浮かべた。

## 黒雲（後書き）

おーひやん怖いー  
冷笑を浮かべられると若干引きますよね  
更新早めに出来て良かったです。

彼女は漆黒の髪をなびかせて、一人小さな何もない丘の上で、まるで世界の全ての音を聴こうとしているかのように目を閉じて佇んでいた。

その時、一陣の風が吹き、彼女はゆっくりとその目を開いた。

大きな黒い瞳に怜俐な光が宿る。

彼女の視線の先には、彼女と同じく黒い髪を持った青年が居た。彼女は彼の蒼い瞳を真っ直ぐに見据える。

彼女の視線に気がつくと、彼は微笑んで彼女の方へと歩み寄った。

「どうした？」

彼女は静かに問うた。

「星が綺麗だつたからな」

彼は空を仰いだ。彼女もつられて空を見上げる。

漆黒の闇を写し出したかのような、新月の夜空に、金色に輝く星肩が瞬いていた。

## 漆黒（後書き）

黒色大好きですw

次の更新も早めに出来るかと思います。

## 眞実

「貴女、本当はあたしのこと、嫌つてるんじゃないの？」

黒いセーラー服とした長髪を持つ、薄水色の着物に身を包んだ少女に、先のカールした金色の髪をすきながら、彼女が訊いた。

黒髪の少女は「別に」と素っ気なく答える。

金髪を揺らしながら、彼女は更に強く、疑心にまみれた声で問いかける。

「自身に誓つて言える?」

少女は面倒になつたのか、黒い瞳で彼女を睨み付け、持つていた一冊の本を開いた。  
そして、呟く。

「人の気持ちがどうあれ、自分は自分、それ以外の何者でもない」

「それだけだ」と、少女は本を見つめながら呟く。

金髪少女の問いはこれから無視しようとしているようだった。

しかし、何を思ったのか本を閉じ、黒い瞳を正面から彼女に向けて、言った。

「別に信じてもらわなくともよいが、私はお前を嫌つてなどいない。  
それが、先程のお前の質問に対しても、私が持つている唯一の眞実だ」



## 深紅

彼女は深紅に輝く短剣をふりかざし、叫んだ。

「我が紅よつ！」

その命に答えたかのように、突如として濃紅色の炎が鮮やかに燃え上がった。

共に激しい熱風も巻き起こり、彼女の少しカールのかかった金色の髪を舞わせる。

まるで意思を持つているかのように、その炎は彼女の周囲を取り囲んだ。彼女を守る、シールドの如く。

彼女は、目の前に立っている、彼女と同年代の、長い黒髪を持った少女をキッと睨み付けた。

「……が、貴女の死場所よつ！」

彼女は疾走する。桃色の残像が微かに残る。

「……そうか」

少女は淡々と彼女を見つめ返し、目を閉じた。

刹那、彼女の全身から殺氣とも見えるような薄水色のオーラが溢れだし、ほとばしる光の奔流が彼女に襲いかかる。

「……つー」

桃色と薄水色の残像が交差し、カキン、と高い金属音が辺りに響く。

黒色の短剣と紅色の短剣がぶつかっていた。

「…………。 そうまでして、私を殺すか？」

少女は、黒い短剣を降ろし、同色の瞳で彼女を見つめた。

彼女は暫く手元の紅のそれを眺めていたが、ゆっくりと少女に背を向け、歩き出した。

「…………次に会ったときに決着をつけるわ」

少女はただ彼女を見つめていた。

## 退屈

「……退屈ね

彼女は呟く。太陽の光を浴びて黄金に輝く髪をすきながら。

「……退屈だ」

少女も呟く。太陽の光を浴びて漆黒に輝く髪を撫でながら。  
「だが、世界は動く」

少年は答えた。太陽の光を浴びて黒色に輝く髪に触れながら。

「……ああ」

漆黒の髪の少女は、可笑しそうに同意を示す。

「退屈」というのも、私たちの世界の、一つの動かしかたなのかな  
らね

金髪の彼女も、賛同するかのように、妖艶に微笑んだ。

「退屈なのも、いい」とだらり<sup>フフ</sup>。

少年は、笑顔で纏めた。

「……世界は、回るのよ」

金髪を揺りしつつ、彼女はそう呟いた。何か深い意味があつたのかと、少年は彼女を見るが、彼女は済ました顔で、空を見つめていた。快晴。雲ひとつなかつた。

少年も、空を眺める。

「……どうかしたのかい？」

何気なく、尋ねた。返答は無かつた。

少女は尚も済ました顔で、物騒なことを口にする。

「もし、ここで私が死んだとしても、世界は回り続ける。私が居なくなつたことに気がつかずにね。そして私は、再びここに現れるかも知れないわね」

その口調が、「冗談めいていなかつたら、少年は慌てたかもしだい。

少年は、穏やかな笑顔で、「そうかもしないね」

彼女は、彼の方を向いて、優美に微笑んだだけだった。

「……無常、といつのは、中々よくわからない言葉だな」

濡れ鳥色の髪を一つに纏めつつ、笑顔を湛えて彼女は言った。  
少年にとって、彼女が笑っているのを見たのは久しぶりだった。  
気になつて、少年は彼女に問う。「といつと？」

「全ては移り変わるといつ。同じままには止まらない」

「まあ、時は流れるからな」

「今、私が髪を括つたのも、三十分前から私が変わったと言つこと  
になるのか？」

彼女は可笑しそうに、楽しそうに、笑つた。

「だから、永久というのも嘘、幻、夢、虚構。何もない」

そして再び、彼女は笑つた。

「時は、流れのではなく、変えるものなんだよ」

少年の目の前にいたのは、いつもの無愛想な彼女ではなく、大人  
をからかつて遊ぶ、幼い子供であつた。

## 抱擁

少女の漆黒の美しい濡れ髪を少年は優しく撫でながら、囁いた。

「好きだ」

少女は、驚いて振り向こうとするが、少年が思いきり彼女を抱き寄せたため、バランスを崩して少年の元に落ち着く。

「……何をする」

「だつて、好きだからな」

精悍な顔で、彼は答えた。

少女は「馬鹿」と呴いたものの、抵抗も何もせずに、そのまま彼に身体を預けた。

「……大体、お前が私のこと好きだと言つのは知つてゐる」

「さつきの言葉が嘘だつたとしたら?」

「……お前は嘘が下手だ。すぐわかる」

そう言って、彼女は可愛らしく微笑んだ。

少年は、頬を赤くして「悪かったな」と言つたが、彼女はただ微笑むだけだった。

そんな彼女を抱擁したまま、彼は問つ。「俺のことは好きか?」

「……どうだと思つ?」

悪戯っぽく彼女が笑うのを見て、彼は彼女の黒髪の先を優しく撫でた。

そして、そのまま躊躇わずにキスを落とす。

「……なつ

「俺が、嫌いか？」

少女は、頬を紅潮させながら、「嫌いでは、ない」呟いた。

## 失恋

少女は、絶句した。

よもすがら寝れそうもなく、適当に近くを散歩しようと、近くの丘に来たときだった。

彼女が思いを馳せる少年が、自分の友達を抱きしめ、共に頬を赤らめているのを見たからだ。明け方で、太陽の光のせいで赤く見えたのかもしれない。だが、彼女にとって、彼が自分以外を抱きしめている、その事実だけでも十二分に苦しく、悔しかった。

「なんで、なんで……っ。なんで彼女ばかり…………！？」

少女は、一人から遠く離れ、小さな森の奥で泣いた。泣き続けた。

「…………許さない…………っ」

そう呟いたとき、彼女は泣きつかれたのか、その場にしゃがんで、うわ言のように「なんで……」と何度も呟きつつ、眠りに落ちた。

「…………なんで…………」

彼女の、初めての、失恋だった。

「私は……彼のことが、好きだったのに」

少女は、空虚な藍色の瞳を虚空に漂わせながら、そう呟いた。

「…………嫌…………」

少女は、先のカールした金髪を振り乱しながら、狂ったように、元気で叫き続ける。

「…………嫌…………。嫌々つ、嫌あ…………つ。嫌、嫌よ、嫌々嫌々

…………」

少女は、藍の瞳の色に反射して、瑠璃色に輝く涙を流しつつ、虚ろな瞳を何もない空の一時点へと向けた。彼女の頬に涙が伝う。

「…………つ、つ…………」

彼女の泣き声は、誰にも届きはしなかつた。

全てが終わった。彼女との関係も。彼との関係も。

「…………」

少女は、虚しく空を見上げる。全てが消えて、無くなつた、虚無感に包まれ、頬を伝う涙にも気を止めず、ただ、思い人との思い出を手探りで探し続ける。全てが終わった。

「…………」

しゃくりあげながら、それでも涙を溢す。彼女の艶やかな黒髪がさらりと揺れた。彼女は握っていた小さな白い瓶を床に落とす。ぱりん、と音がして、ガラス製の瓶は呆氣なく割れた。彼女の心のようだ。

闇よりも深い、美しい瞳に溜まつた雫がとめどなく流れしていく。彼女のまつ、楽しかった思い出は、灰のようになつて、色褪せたものとなり変わっていた。絶望の淵に立つて、そのまま闇の底へと落ちていきそうだった。

「「めんな……さい……」。気持ち……知らなくつ……て……」

「…………」

毒のように、彼女の精神を蝕むのは、初めて出来た女友達への無意識の裏切り。信じていた人を、大切な人を、無意識に裏切ったことへの罪悪感だった。

「…………私…………死ぬ、から…………。彼と、幸せ…………」

先程落とした瓶からこぼれ出た白い小さな錠剤を、数個掘んで、口へ持っていく。

数秒の間のあと、彼女はゆっくりとそれを口に入れた。

「…………さ、よ…………な…………ら…………」

涙が瞳から零れ落ちた。

**毒殺（後書き）**

題名と少しすれている気がしないでもない。

「…………なつ」

少年が、部屋に入つて最初に目にしたものは、倒れふしている大切な少女だった。

鳥色の美しい髪も、病的に真つ白な肌も、整つた顔立ちも、薄水色の着物に包まれた小さな身体も、全てが愛しい少女のものだった。

「…………何で…………」

言葉が出ない。絶望と希望と共に、少年はゆづくつと、倒れている少女に歩み寄る。

「…………息、してゐ…………！」

少年は、彼女の口元に手を当てて、空気が揺れているのを感じた。まだ、生きている。

彼はそれに気が付くと、先程とはまつて変わって迅速に、動き始めた。

「…………大丈夫かっ、おいつ、起きるつー！」

必死に叫ぶも、返事は無い。

どうすればいいのか分からぬまま、周りを見渡すと、小瓶が割れたのか、ガラスの破片が飛び散っていた。

「…………やめる…………」

少年自身、何に對して言つてゐるのか、分かつていなかつたに違いない。

彼は、彼女の軽い身體を抱き上げると、その唇へと自分のそれを押し付けた。

「…………」

一瞬で、少年の瞳の色が、深い闇色から、淀んだ蒼色へと変化する。空中に漂つていたエネルギーが、音を立てて、彼の回りに渦巻き、収縮する。

そして、彼が目を閉じた瞬間、大きなエネルギーが、少女の体内の毒を浄化していく。

きらきらと、美しく光の粉が辺りに散つた。

「…………生きる」

彼のその言葉と共に、少女は目をゆっくりと開いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0290u/>

空想的な自己理論。

2011年12月18日12時48分発行